

## 第40回講演会 開催報告

当協議会の会員は、各企業とも中国事業に真剣に取り組みを進めています。本日の講演会にも各社経営トップの方がご出席をいただくように皆様とても関心の高いところですが、なにぶんにも中国は大きな国であり、なかなか分からないところが多くありますので、様々なことを勉強したいと思います。

(橋本運営委員長による、開会の挨拶より)



1. 日時：11月28日(火) 16:00~17:30  
(講演会終了後、懇親会)
2. 場所：大和ハウス工業株式会社 東京本社ビル 2F  
コンベンションホール
3. 講師：谷野 作太郎氏 (元中華人民共和国特命全権大使)
4. テーマ：「アジアの巨龍・中国とどう向き合うか」  
～ ポスト党大会と日中関係 ～
5. 参加人数：46社 123名

今回ご講演をいただいた谷野氏には、当協議会の会報誌『日中建協 NEWS』に2015年3・4月号より1年間、全6回にわたり「日本と中国」と題して、連載をいただきました。その後2号にわたり特別寄稿もいただきました。その内容は、国交正常化までの道程、最近の中国情勢と日中関係、歴史と如何に向き合うか、そしてアジアの国々との関係など広範囲にわたる視点から秘話も含めご紹介をいただきました。

そして、その内容に加筆・修正をしたものが東洋経済新報社より『中国・アジア外交秘話』として昨年(2017年)4月に上梓されました。会員の皆様には各社宛1冊ずつお送りしております。

### 谷野作太郎氏 講演

本日はこのような貴協議会の大事なお集まりに、私のような老人にお声がけいただき恐縮に存じます。もう81歳の老兵。でも、廢残兵に成り果てないよう、後ほどお話しするように、今でも時々中国の方に足を運び、また役所の後輩たちの話を聞くなどして、最近の中国状況やら日中関係について、基本的なところだけはフォローするように努めております。

中国：今と昔 経済の規模、軍事力など

2000年当時、日本一国の経済規模(GDP)は、中国、韓国、台湾、香港、ASEAN10カ国、インド、オーストラリア、ニュージーランドのそれぞれの経済規模を総計したものより大きかった。ところが、それからわずか15年後、中国が日本にとって代わり、今では、中国一国の経済規模が、日本、韓国、台湾、香港、ASEAN、インド、そしてオーストラリア、ニュージーランドの経済規模の総計を抜くに至ったということです。

一昔前、私達の東アジアの経済発展について「雁行形態の発展」ということが言われたものです。隊列を組んで飛翔する雁の群れ、先頭に日本がいてこれを率い、次に韓国、台湾、シンガポールといったところが続き、最後に中国、そしてシンガポール以外のASEANの国がこれを追いかける。上位から下位の方に資金が提供され、技術が伝授され、もって東アジアは一体となって経済発展の道を進むと。ところが今では、かつてはきれいに飛んでいた雁の隊列も乱れ、大雁、中雁、小雁たちが鳴き声も様々に飛び回るといったところでしょうか。「共鳴、共創、共栄」を目指すということですが、残念ながら日本と中国の間一つをとっても「政治」が邪魔をしてそのようにはなっていません。本来、日中が障害を乗り越え心を開いて協力し合えば、いろいろなことが出来るはずで

## 第19回中国共産党大会

党大会は、10月18日から24日まで北京で開催され、翌25日、中国共産党中央（政治局）の新しいライン・アップが選出、発表されました。私が、今回の党政治局人事で注目したのは次のようなことです。第一に既に一部で噂されているように、習近平氏が3期目を目指す構えなのかということです。しかし、今後5年といえは短いようで長い。その間党内情勢にせよ、中国の政治情勢にせよどう動くかわからないというところではあります。

第二に、ヒラの政治局員ではありますが、楊潔篪国務委員と劉鶴中央財經指導小組弁公室主任が選ばれたということに注目しました。楊潔篪氏は駐米大使、外交部長を経て外交担当の国務委員として中央委員入りした人で、彼が一段上の政治局入りしたということは、中国外交は今後一層対米関係を重視していくということでしょう。もう一人の劉鶴氏はもともと軍人出身のようですが、その後経済の道に入り、中国経済についてサプライサイド・エコノミー改革の重視派として知られた人です。ならば、中国はいよいよ中国経済の重荷になっている国有企業の改革に本気で乗り出すのではないかと思います。

この後、「好調なサービス業、科学技術の力」についてのお話があり、一方で「中国経済のウイークポイント」を指摘され、そして、今回の講演のタイトルである「アジアの巨龍・中国とどう向き合うか」についてお話をいただきました。その中では、「中国の人達のモノの考え方」、「日中関係—曇り空の合間に少しだけ青空が—」、そして「2017年という年」を総括され今後への指針をいただきました。

そして、最後に「日本の若者たちへの期待と要望（一老人の繰り言）」として、最近の若者への真剣な繰り言ですと期待を述べられました。その第一は、これから世の中を担う若い人達には、世界と伍していく為にディベート、人前での発表能力を磨いてほしい。第二に、最近の若者たちの活字離れが心配。次に、近頃職場での生き生きした、さんざめく会話が姿を消してしまったことへの違和感。最後に、日本の若い人達に、近代史について基本的なことは勉強してほしいということ。

質疑応答においては、YKKAP（株）の吉田会長から、「中国とビジネスを進めるに当たって、どのようなことに注意し、何を心得ておけばよいか」ということを改めて聞きたいとの質問がありました。

谷野氏からは、中国とのビジネスで長い歴史と経験をお持ちの吉田会長からは、むしろいろいろとお話を伺いたいとしながらも、せっかくなので次のようにご回答いただきました。また、お話しする内容は、本日会場にお見えになられている菅野真一郎さん（東京国際大学客員教授）がご自身の経験からお話しになっていることの（私も納得したうえで）受け売りですとの前置きがありました。

第一は、日本企業について今なおよく言われることは、経営の現地化が不十分ということです。第二に、中国で事業を立ち上げる時、しっかりとしたマーケットリサーチを先行させ、その上で弁護士の力を借りてしっかりとした契約書を作ること。第三に、中国人はとにかく面子にこだわるので、従業員を褒める時は大勢の前で、叱る時は自分の部屋に呼ぶか書面で。また、中国人は恩義を非常に大切にするので、中国語で「雪中送炭」。困っている時にそっと助けるということが将来役に立つこともある。最後に、中国で仕事をする人は中国を好きになりなさい。少なくとも中国という国に関心を持つということが大事。そして、歴史への対応については、中国の方は「忘れないでください」でも「聞かないでください」と言われる。わざと非生産的な質問はぶつけないことです。

講演会の内容については、会報誌「日中建協 NEWS」No.231号（2018年1・2月号）に詳しく記載しています。

講演会終了後、講師の谷野様にもご参加いただき、会場を大和ハウス工業（株）東京本社ビル23階レストランに移動して懇親会を開催し、104名の方が講演会に引き続きご参加いただきました。谷野様には、出席者の多くの皆様とお話いただき、質問にお答えいただいたり現地情報の交流をいただきました。